

## 国語

※答はすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あととの問いに答えなさい。

わたしたちはあれこれひとりで思い悩み、答えがどうにも出ないとき、その思い①煩いをだれか親しいひとにちょっとでもわかつてほしいと願う。「そうだ、そうだね」と他人にうなずいてもらいたい、相づちを打つてももらいたいと願う。他人に自分の思いを分かちもつてもらうことで、少しでもいいからいまよりは楽になりたいと思う。

ひとに自分のふさぎ（鬱ぎ）について聴いてもらうと、たしかにその②コウカはある。聴いてもらうだけでちよつと楽になつたというのは、だれもがしばしば経験する」とである。だから具体的に何ができるわけでもなく、せめてじつくり聴いてあげる、そして同じ思いに浸るというかたちで、そのひとのサポートをしてあげようとは考へる。【 A 】「共感」や「同情」である。

英語に「シンパシー」(sympathy) という言葉がある。シンパシーはギリシャ語の接頭辞syn-と、同じくギリシャ語のpathosを組み合わせた言葉で、苦痛や悲しみをともにするという意味である。symphonyが音響を合わせるという意味で「交響曲」と訳され、synthesisが異なる考えを合わせるという意味で「綜合」と訳されるのと同じようだ。sympathyは「共感」や「同情」と訳される。けれども、「共感」とか「同情」というのは、はたして異なる思いを一つに溶け合わせるといつゝことなのだろうか。「あなたの気持ち、わかります」と言うのは、「わたしはあなたと同じ気持ちでいます」「わたしはあなたに合意します」というふうに「思い」や「考へ」を共有する」と、合一化する」とと同じだろうか。

聴くことがもっとむずかしいのは、聴いても言葉を返しようがないとあらかじめわかつているときである。③重篤な病気になつた友人、家族を失つた被災者、子どもを失つた両親、ホスピスの患者さん、くり返し病に冒される知人……。このひとたちの前に立つたとき、とつさにどう声をかけていいのかわからず、怯んでしまう。<sup>ひる</sup>まさに聴くことしかできないのである。【 B 】ひたすら聴く

といふ」と、そのことには大きな意味がこもつている。

このような場合にじつと聴くのがむずかしいのには、いくつか理由がある。一つは、苦しみやふさぎの理由を問うても答えがないことは、話す本人がわかっているから。(a)

第二に、ひとはほんとうに苦しいときには話さないものである。(b)

第三に、迎え入れられるという確信のないところでは、ひとは他人に言葉をあずけないものだ。(c)

そして最後に、とくに家族の場合、自分が漏らす一言一言を身内は聞き流すことができず、それらに過剰に反応してしまう。(d)

聴くというのは、それほどにむずかしいことである。が、それでもひたすら聴かねばならない。最後まで聴き切らねばならない。聴くだけ、言葉を受けとめるだけといふことが意味をもつのは、いつたいどうしてか。

苦しみやふさぎのなかに④溺れてしまつてゐるひとが、それでもそれについて語るために自分

苦しみやふさぎについて、どんなきっかけ、どんな経過で「こんな苦しみやふさぎに襲われる」とになったのか、その理由と考えられるものは何か、いまはどんな状態か、というふうに、苦しみやふさぎから身を引きはがし、ことがらを時系列に並べ換え、整理して語らねばならない。このように自分の苦しみやふさぎにある距離をとり、それを対象化するなかで、それらとの関係が変わるということが「」ではとりわけ重要なのである。つまり、苦しみやふさぎを当初あつたのとは別の地平へと移し変えねばならない、他者を前におのれについて語ることの意味はある。語るということとは、相手に回答をもひうどうことではない。見えない自分の姿を映すために、その鏡の役を相手にしてもううことであるのだ。

が、鏡であるべき聞く者は、話の中身が重いし、【C】相手からなかなか言葉が漏れてこないので、その緊迫になかなか耐えきれない。身を固くしてじりじりと待つだけで疲れはててしまう。そのうち待ちきれなくなつて、「あなたが言いたいのは『』ことじゃないの?」と誘い水を向ける。話すほうはその明快な語り口について乗つてしまつ。「わかつてやらえた」と。が、これはじつはもつともまずい聞き方なのだ。なぜなら、(1) 語る」との意味は、語ることによってみずからの閉塞から距離をとれることがあるのに、そのチャンスを聞く側が横取りしてしまうからだ。これでは聞くことにならない。

だれかに聞いてもらおうとひとが重い口を開くのは、何を言つても受け容れてもらえる、(5)リュウボをつけずに、反論もせずに、とにかく言葉を受けとつてくれる、自分がそのまま受け容れてもらえる、そういう感触を確認できたときである。このとき、相手に見守られている、自分が相手の関心の宛て先になつてゐるといつゝことが大きな力になる。関心をもつひと、じつと待つてくれるひとの前ではじめて、ひとは口を開くのである。西洋のひとたちが関心のこととをインタレストと呼ぶことには、(6)含蓄がある。インタレストという語は、ラテン語の *inter - esse*、つまり相互的な存在であるという「」(inter-being) からきているのだ。

聞くときには大事なのは、最後までつきあつてじるだ。《時間をあげる》といふことだ。語る／聞くという関係のなかでは、「ふれあい」よりも、ずれや齟齬そご、すれ違いのほうが(7)ケンザイ化してしまつ。が、「」のぎすぎとした関係を何度も経験する「」が大切なのだ。」という(8)シコウサクゴのくり返しの果てにしか、ほんとうの意味で、語る／聞くという関係は生まれてこない。語りは信頼を前提とするが、信頼は言葉の積み重ねのなかでしか生まれてこないからである。そういう言葉のやりとりにかける時間を、ひとひとはなぜか惜しむようになつてゐる。

「言葉」というのは不思議なもので、交わせば交わすほどたがいの違いが際立つてくる。たがいに理解しあうということ、相手のことをわかるということは、相手と同じ気持ちになることだと思つてゐるひとが多い。しかしそれは理解ではなく合唱みたいなものであつて、同じものを見ていても感じる」とが「こんなにも違うのか」というふうに、違いを思い知らされる」とが、ほんとうの意味での理解ではないかと思う。

以前、友人の家族と会つたとき、母親が自分の息子を指をして「」の子とは性しょうが合いませんねん」と言つた。このお母さんは(9)ステキだなと思つた。ひとには言つてもわからないことがある、それを知つたうえでそれでもいつしょにいる。わからなくともたがいの信頼が揺るがないことを肌で感じている……。性が合わなくもいい、いや【D】合わなくて当然なのだ。

「納得」という言葉がある。「納得」というのは不思議な気持ちで、「あなたの言うことはわかるけ

ど、納得できない」と、わたしたちはしばしば口にする。逆に、「あなたの言っていることはわたしには肯うることはできないけれど、でも納得はできる」とか「事はそれで解決したわけではないけれど、納得はした」と口にすることもある。

このように、「納得」にはどうも、事態の理解、事態の解決には尽きないものが含まれているようだ。【E】わかつてもりたいと願つて口を開いたひとが、「わかる、わかる」と相手にすらすら言葉を返されると、「そんなにかんたんにわかられてたまるか」と、逆に頑なになるのだろう。ある家庭裁判所の調停員からおもしろい話を聞いたことがある。離婚の調停で、⑩双方がそれぞれの言い分をぶつけ合った果てに「⑪バンサク尽きた」「もうあきらめた」「いくら言つてももう無駄だ」と観念したとき、そのぎりぎりの⑫ケツレツのときにこそ、ほんとうの話しあいの途が微かに開けることがあるというのだ。訴え合いのプロセス、交渉のプロセスが尽くされてはじめて開けてくる途がある、と。

言葉のぶつけ合いの果てに、相手方のなかにその相手（つまり、このわたし）の心根をうかがうような想像力もしくは関心がふと芽生えたことを察知したとき、そしてこの⑬修羅場から降りずに、果てしなく苦しいこの同じ時間を共有してくれたことそのことにふと意識が及んだときに、「納得」ということが起ころうわけだろう。その意味では、「納得」は、事態の解決というより、その事態に自分とは違う立場からかかわるひととの関係のあり方をめぐつて生まれる心持ちなのだろう。

聴くというのも、話を聴くというより、話そうとして話しきれないその疼きを聴くということだ。そして聴き手の聴く姿勢を察知してはじめてひとは口を開く。そのときはもう、聴いてもらえるだけでいいのであって、理解は起こらなくていい。妙にわかられたら逆に腹が立つというものだ。

こうして一つ、たしかなことが見えてくる。（2）他者の理解とは、他者と一つの考え方を共有する、あるいは他者と同じ気持ちになることではないということだ。むしろ、苦しい問題が発生しているまさにその場所とともに居合わせ、そこから逃げないということだ。

こういう交わりにおいて、言葉を果てしなく交わすなかで、同じ気持ちになるどころか、逆に両者の差異がさまざまの微細な点で際立つてくる。「ああ、このひとはこういうとき、こんなふうに感じ、こんなふうに惑うのか」と、細部において、ますます自分との違いを思い知ることになる。それが他者を理解するということなのである。そして差異を思い知られつつ、それでも相手をもつと理解しようとしてその場に居つづけること、そこにはじめてほんとうのコミュニケーションが生まれるのではないかと思う。このことはもっと大きな社会的次元においても、つまり現代社会の多文化（マルチカルチャーラル）化のなかで起こるさまざまな⑭葛藤や衝突のなかでも、同じように言えるはずだ。

（鷺田清一『わかりやすいはわかりにくい？——臨床哲学講座』二〇一〇年、筑摩書房。  
ただし、作間にあたり一部改変した。）

問一 傍線部①から⑯の漢字にはひらがなで読みをつけ、カタカナは漢字に直しなさい。

問一【 A 】から【 E 】にあてはまるものを次のなかから選んで入れなさい。

【 けれども だから むしろ いわゆる しかも 】

問二 (a)～(d)には、次に挙げた文が入ります。それぞれ、適切なものを次のア～オから一つずつ選んで記号で答えなさい。

ア ほんとうはそのことは考えたくない、忘れていたいのに、他人に語ることで苦しみをわざわざ二重にすることはない。

イ 直接かかわらないで、ただじっと見てている、あるいは何もしないでただ横にいるということが、ポジティブな力になることがある。

ウ 「そんなこと思っていたのか。こっちの身にもなってくれ」と返され、そして「言わなきやよかつた」と一度と口を開かなくなる。

エ 「言つたつてわかつてもらえるはずがない」。それでもようやくと口を開いても、一言一言が相手にたしかに届いているか確認しながらしか話せないので、どうしてもひとつひとつとした断片的な語りになってしまいます。

オ なぜこのわたしが病に冒されるのか、こんな状態でも生きづけることは死ぬことより大事なのか……と問いただしても、だれも答えを返せないに決まっている。

問四 (1) 「語る」との意味は、語ることによってみずから閉塞から距離をとることにあるが、そのことについて、文章中の言葉を用いて八十字程度で説明しなさい。

問五 (2) 「他者の理解とは、他者と一つの考え方を共有する、あるいは他者と同じ気持ちになる」とではないということだ。むしろ、苦しい問題が発生しているまさにその場所にともに居合わせ、そこから逃げないということだ」とあるが、そのことについて、文章中の言葉を用いて一〇〇字程度で説明しなさい。

問六 この文章についてのあなたの意見や感想を一〇〇字程度で書きなさい。そのあと、「コミュニケーション」、「差異」の二語を用いること。